

第33回（令和2年度）

「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」

優 秀 作 品 集



令和3年1月

公益財団法人小佐野記念財団

■ 目 次 ■

最優秀賞

- 中 学 生 の 部 題名「全世界へ幸せを～国際交流で私たちができること～」
甲 陵 中 学 校 1 年 横 森 穂 夏…………… 1

優秀賞

- 小 学 生 の 部 題名「マレーシア人との交流を通して」
山 梨 大 学 附 属 小 学 校 6 年 石 井 野 愛…………… 5
- 中 学 生 の 部 題名「国際交流について～私の提案～」
南 西 中 学 校 1 年 清 水 千 遥…………… 7
- 題名「夢と希望に溢れる世界へ」
北 東 中 学 校 2 年 宮 澤 優 那…………… 9
- 題名「体験の発信を通じて願うこと」
北 東 中 学 校 1 年 出 井 茉 莉…………… 1 1

佳作

- 小 学 生 の 部 題名「ピーちゃんとおとしのおとまり会」
若 草 小 学 校 3 年 塩 沢 恵 菜…………… 1 3
- 中 学 生 の 部 題名「貧困について」
北 東 中 学 校 1 年 長 田 七 果…………… 1 5
- 題名「留学生との交流で思ったこと」
北 東 中 学 校 2 年 三 科 ま ゆ 香…………… 1 7
- 題名「平和な世界のために」
山 梨 英 和 中 学 校 1 年 関 満 理 子…………… 1 9

※作品は原文のまま掲載しております※

最 優 秀 賞

中学生の部 最優秀賞

「全世界へ幸せを～国際交流で私たちができること～」

甲陵中学校 1年 横森 穂夏

みなさんは、幸せに暮らせていますか。多くの人が毎日食事をとり、勉強をし、健康に過ごしていることが日常だと思います。しかし、世界に目を向けてみてください。一分で十七人もの人が飢餓で亡くなるという事態が起きています。普段何気なく物を食べている私たちにはどうてい考えられませんか。私たちの日常は世界全体で見ると非日常で、とても幸せなことなのです。けれども、知るだけでは意味がないと思います。先進国の一員として、発展途上国を救う必要があります。

この作文を書くうえで私は、世界の人々はどのような状況なのか気になり、詳しく調べてみることにしました。すると、自分のこれまでのイメージとはかけ離れたものがあり、驚きとともに少し悲しくなりました。まず驚いたのは、世界の人々の死亡原因で一番多いのは「飢餓」だということです。私にはこれまで、命を落としそうなほどお腹が空いた経験がありません。むしろ、家にいるときは冷蔵庫を開ければいつでも食べ物があります。しかし、そのような人は世界で見ればごくわずかなのです。さらに、問題はそれだけではありません。世界に七千九百五十万人いる難民は、日常的に暴力を受け、子供にも関わらず労働をし、安全な水さえ得られません。

同じ人間なのに、こんなに生活に差があって良いのでしょうか。私は絶対にあってはならないと思います。世界中の全員が同じような幸せを味わって初めて地球が笑顔であふれるのです。その方法の一つに、「寄付」があります。これは、他国への詳しい知識がなくても、簡単に行うことができます。例えば、一万五千元あれば、きれいな水を届ける井戸の手押しポンプ用器材一基分に変わります。一万五千人の人がいたとしたら、その一人一人がたった一円を寄付するだけです。水を必死に探す。やっと見つけたと思ったら、汚く不衛生な泥水。それを命がけて飲む。そんな生活をしている彼らにとって、無限にきれいな水が飲める生活はまるで夢のようだと思います。また、募金だけではありません。ペットボトルキャップ八百個の寄付で様々な病気から命を守るワクチンを打つことができます。「八百個」と聞いて、かなり地道な作業だな、と思うかもしれませんが、私たちにとってはゴミとなる、あの小さいキャップが命を救うのです。そんなキャップを日本中の人が集めて寄付したとしたら、数えきれないほどの命を助けることができるでしょう。そう考えるだけで、私もワクワクしてきます。

「国際協力」と聞くと、どうしても大げさにとらえてしまいがちですが、このような身近なことでも世界平和にこうけんすることができます。さらに、寄付からまた一步踏み出したところに「国際協

力団体」があります。実際に現地に行って食糧援助や支援を行うのです。自分の手で命を救うのですから、きっと日本からの寄付以上の充実感、達成感があると思います。

ここまで色々述べてきましたが、国際協力のカギはやはり他の国との交流だと思います。私自身まずは、普通に生きることもできなく、苦しい生活をしている難民の方々に実際に会い、話を聞きたいです。死ととなり合わせの生活をしている人が世界にたくさんいるということを知っているとはいえ、知られていない苦労はまだ必ずあります。様々な人の気持ちを知ることこそ、国際協力につながると思います。また、国際的なイベントもあれば、他の国の人々ともっと深い関係も築け、必然的に国際交流ができると思います。そして、その交流を経て、先進国である日本がたくさんの難民を受け入れることができれば、少しずつ地球に笑顔は増えていきます。

日本自ら国外へ出ていくことも大切です。現在、JICAなどが現地で支援を続けていますが、難民はまだまだたくさんの支援を必要としています。そこで、もっと多くの人が積極的に国際的なボランティアをすると良いと思います。世界の国々を日本の素晴らしい文化で元気にし、やがて日本が「ボランティア大国」になったらいいなと考えています。

世界には、命がけの生活を強いられている難民がたくさんいます。しかし、行動に移さなければこの現状は何も変わりません。だからこそ、細かなことでも難民の支援に関わることを始めてみるのが重要です。私は今後、積極的に募金をしようと思います。その努力が積み重なれば、世界は笑顔でいっぱいになるはずです。住む場所も話す言葉も全く違うとはいえ、全員が仲間です。国際協力に興味がない人も、硬貨1枚、キャップ1個から始めてみてはどうでしょうか。全世界の七十二億人全てが元気に、そして笑顔に暮らせること、それが「本当の幸せ」なのです。

優

秀

賞

小学生の部 優秀賞

「マレーシア人との交流を通して」

山梨大学附属小学校 6年 石井 野愛

私達は外国やそこに暮らしている人達のことをどのくらい知っているだろうか。

私の家では姉の高校で行われているマレーシアからのホームステイを二回受け入れたことがある。一回目は私が小学四年生の時で、ほとんど英語が話せなかったのでも心配だった。このホームステイでは二人の高校生が来た。外国から人が来るのは家族にとっても初めてだったため、日本での暮らしをどんな風に体験してもらえばよいかと家族みんなが準備に忙しかった。そして、受け入れ当日は姉の学校へワクワクしながらみんなで迎えに行った。家に帰ってきてからは姉が部屋や家での過ごし方を英語で説明したが、私はこの日緊張して「Welcome」としか言えなかった。次の日、緊張していた私に二人から話しかけてくれてトランプやオセロをして遊んだ。英語が話せない私は、和英辞典や携帯電話の通訳アプリを使い話すように努力した。スムーズとはいえないやり取りでも、聞いてくれた二人に心が少し打ち解けたような気がした。他にもアニメのお店に行きショッピングを楽しんだ。二人はマレーシアの母国語のマレーシア語だけでなく、英語も話せたが、他にも韓国語、中国語そして日本語も少し話せることにとても驚いた。日本語はアニメやマンガから覚えたと聞き、ますますびっくりした。

次第に仲良くなるにつれて、マレーシアと日本の違いに気づいてきた。例えば、マレーシアでは多くの人がイスラム教徒で、一日に五回、決まった時間に神様がいらっしゃる聖地メッカの方向を向いてお祈りをしなければならないという。しかし、日本にはそのような決まりがなく、外に出かけている時はどこでお祈りをしているのかわからずに困った。だから、予定を早く切り上げて急いで家に帰ったこともあった。外出時の服装にも違いがあり、女性は頭に「トゥンドゥン」というスカーフをかぶらなければならない。色は青や黒、ピンクがあった。私もかぶらせてもらったが、生地がさらさらで、見た目よりも涼しく、おしゃれだと思った。食事にも制限があり、宗教上の理由で豚肉やそれを原料とする食べ物は基本的に食べてはいけない。これを「ハラーム」といい、反対にイスラム教の人が必要通りに調製された食品を「ハラール」というそうだ。ハラールは世界共通のマークがあるが、日本でこのマークがついた食品を探すことに苦労した。このように、私達の生活と比べて決まりがたくさんあることを知った。マレーシアのことだけでなく、ふだんは気づきにくい山梨のことも見直すことができた。山梨の情報は国際交流センターに行き、パンフレットをもらって調べた。いろいろな言語のパンフレットが用意されていることから山梨には多くの外国人が訪れることがわかった。また、富士山や果物など山梨でしか体験できない自然が豊かな県であることも良さとわかった。パンフレットの情報をもとに、足

湯にも出かけた。二回目の受け入れは一年後の五年生の時だった。前回のことを生かし、時間を細かく決めて行動した。以前よりも自分から積極的に話しかけるように心がけた。マレーシア人の生活習慣や宗教も尊重しながら日本の生活や山梨の自然を楽しんでもらえたと思う。

二回の受け入れを通して、私は外国やそこに暮らす人のことをあまり知らないと感じた。現在、コロナ感染症が流行する中、外国との交流は少なくなっている。しかし、この流行が収まったら行きたい国はどこかというアンケートをアジアの人々に実施したところ、日本が一位になっている。来年の夏に延期されたオリンピックには外国からたくさんの人々が来るはずだ。私はもっと外国の文化や習慣を知りたい。それが外国への理解や外国人への思いやりにつながると思う。そして、その思いを情報や交流場所の提供という形にしていきたい。ホームステイの受け入れは私にとって、とても貴重なことだった。これからもたくさんの外国人と関わっていくために、私は英語の勉強を一生懸命励んでいる。もし、困っている外国人を見かけたら「Shall I help you?」と笑顔で話しかけたい。

中学生の部 優秀賞

「国際交流について～私の提案～」

南西中学校 1年 清水 千遥

新しい時代に幕をあけた日本を突然おそった新型コロナウイルスという未知なるウイルスによって東京五輪といったビックイベントが延期になった。旅行にも行けず、外国の文化を知る機会や交流、日本の文化を発信できるような行事が少しずつ減らされてきている今日この頃。もはや隔離状態ともいえるようなたいくつした生活。私はこんな状況の中で自国の文化を伝え合えるような方法がないだろうかと考え始めた。

私が小学生の頃、フランス卓球連盟の方々が私の通う小学校に訪れた。私はスポーツにあまり関心がなく、とても運動が苦手で、もちろん卓球には全く興味がなかった。フランス卓球連盟の代表の方のスピーチ、先生や児童代表のあいさつが終わり、時間が余ったので先生がフランス卓球連盟の方々への質問コーナーを設けてくれた。質問コーナーでは、通訳さんを通して会話をし、東京五輪に向けてどんな練習をしているのかや、フランスとはどんな国なのかといった素朴な質問まで、優しく、分かりやすく、事細かに答えてくださった。また、フランスの卓球選手は東京五輪に向けて、山梨県の練習場で練習しているということを知り、日本の卓球選手だけでなく、フランスの卓球選手も応援したいと思った。

さらにこの日には、ウィーン小年合唱団があることで有名な音楽大国オーストリアから、「トリオクラビス」という三人組のアーティストの方々も学校を訪問し、合奏を聴かせてくださった。「トリオクラビス」は、ピアノ、サクソフォン、ヴァイオリンの3つの楽器で音楽を奏で、私は楽器の音色の美しさが心に響き圧倒された。私は前から音楽が大好きで、ピアノを習っていたけれど、サクソフォンやヴァイオリンといった楽器には上品で貴重なイメージもあってか興味がなかった。けれども、「トリオクラビス」の演奏を聴いて、もっとたくさんの楽器を演奏してみたい、知りたいと思い音楽への興味・関心がより一層増した。この交流をきっかけに中学校では吹奏楽部に入部し、フルートを担当している。

「トリオクラビス」の演奏を聴けなかったら、吹奏楽部には入っていなかったと思う、フルートにも出会わなかったと思うので、このような交流の機会を与えてくださったことに感謝している。

しかし、コロナウイルスの影響で渡航ができないので今の状況では不可能といっても過言ではない。本場の物や海外の新鮮な文化やスポーツを知る機会が少しでもあれば、誰もが私のように心を動かされ、隔離された生活が一変するような何かに出会えるかもしれないと思う。

そこでインターネットやメディアなど画期的なものを国際交流に積極的に利用することを提案する。現在日本でも浸透してきている「リモート」で国と国をつなぎ、互いの文化を伝え合うことでリモート利用の可能性の視野を広げることができる。私は日本以外の国に関心を持つことで、その国の伝統を知ることができ、考え方の視野が広がり、大人になったときにこれまでの固定観念をくつがえすような何かを生み出せるのではないかと考えた。また、直接会って交流することができない状況だからこそ、リモート演奏やリモート会話・インタビュー、リモート交流などインターネットや SNS を有効活用することで世界が再び一つになれると思う。来年には東京五輪があり、世界と手と手を取り合い協力していかなければならない。国際交流をすることで国と国同士が助け合えるような関係を築くことができるから、東京五輪が一年後に迫ったすさまじい今に必要なのではないかと思う。世界が一がんとって取り組むことは新の世界平和につながると私は強く信じている。

「夢と希望に溢れる世界へ」

北東中学校 2年 宮澤 優那

国際交流。私は、この言葉の本当の意味を知らずに今まで過ごしてきました。初めてこの言葉を聞いたとき、国と国が仲を深めたり協力したりすることだと思い、「自分には関係のないこと」と解釈して、私は現実から目を背けてしまいました。しかし、もう一度じっくり考えてみて、ようやく事の重大さに気づき、私達が目指すべき社会とは何かを知りました。

まずは世界の現状についてです。二〇二〇年の今年は、日本で東京オリンピック・パラリンピックの開催が予定され、活気にあふれる一年が始まろうとしていました。しかし、新型コロナウイルスの影響で開催が延期され不安を抱いたり、混乱してしまう人が多くなったと思います。例えばアメリカでは以前から問題になっていた、人種差別が悪化し、罪のない黒人男性が白人警察官によって殺害されました。私はこのことをニュースで聞いたとき、すごく怖かったです。なぜ同じ人間を肌の色が違うだけで殺してしまうのか、疑問に思いました。そして、なによりも怖いと感じたことは、白人警察官は間違っていると思っていなかったことです。黒人男性は首を抑えつけられながらも、息ができないと言いつづけていました。しかし、白人警察官は黒人男性の首を抑え続けたのです。私は、人はどんな理由があっても絶対に誰かを殺してはいけないと思っています。誰かの命を奮うということは、その人の夢や希望までもを殺してしまうことになります。私はそんなことが許されるはずがないと思っていますが、実際、世界中でそのようなことが起こっています。また、命を奮うまではいなくても、誰かを傷つけてしまうことが多くあります。例えば、SNS等での誹謗中傷です。最近では世界中の人とSNSでつながれるようになり、顔が見えないことを理由に、自分とは直接関係のない人を言葉で傷つける場合があります。言葉の傷は目に見えなくても、言われた人は一生傷が残ります。たとえ国によって文化の違いがあっても、言語が違って、容姿が違って、お互いに理解し合うことが必要だと思いました。

このような状況の中、私は世界中の人々が理解しあえて、つながれるものとは何かを考えました。私の中での答えは、「音楽」です。私は音楽の中でも、歌をうたうことが大好きです。普段の生活で嫌なことがあったり、落ち込んでいるときも好きな歌手の曲を歌ったり、お気に入りの曲を聴くことで、元気になります。だから音楽にはすばらしいパワーがあると思います。それに、国と国を結びきっかけにもなるはずです。実際私は、日本の音楽番組に出演していた海外アーティストに興味を持ちました。そして、その国の音楽や文化を知ることにつながりました。また、音楽は聴いたり歌ったり演奏したりするだけでなく、自分の意見や思いを伝えることができます。言語が違って、表情やうたうときの声音によって感情を理解することもできます。世界では、戦争が今も続いている国もあつたり、悲しい出来事が絶えずおきているので、「音楽なんて」と思われる方もいると思います。それでも、私は世界中の人々が音楽によって前向きな気持ちになることを、信じています。

私はこの作文について考えたとき、国際交流の本当の意味を知りました。私が考える国際交流とは、人と人とが国をとびこえてつながり、お互いの文化を理解しあって、支えあうことです。また、私達が目指すべき社会とは、全ての人々が希望や夢を持って、楽しく生きれる社会だと思いました。海外に行ったこともなければ、外国の人と触れ合ったこともほとんどない中学生の私ですが、これから世界の人々のことを理解して、相手にも日本の文化を理解してもらえるように努めたいです。そして、自分が沢山のの人に夢と希望を与えられるように、自分を見つめ直して笑顔で毎日を過ごしたいです。

「体験の発信を通じて願うこと」

北東中学校 1年 出井 茉莉

私の名前「茉莉」は、中国語の「茉莉花」(ジャスミン)から由来している。上海で働き、生活していた両親が、中国人になじみのあるこの名前をつけてくれた。私も小学六年生まで中国で生活した。その時の経験は、今の私にとって忘れられない宝物となっている。例えば、中国の現地の学校の人と交流したこと、色んな国の人と友達になれたこと、中国でしか味わえない経験を、たくさんさせてもらった。

しかし、日本のテレビから、日本人の中国に対する印象が悪いということに疑問を抱いた。ニュースや情報番組などで、日中関係の悪化や、中国人の行為を批判する報道を多く目にした。そうした、政治問題や一部の人の行動が大きく取り上げられることで、中国全体への偏見が生じていると思った。しかし、中国は多くの日本人が知らない、良い所がたくさんある。私が生活した中で感じた、中国の良い所を3つ紹介する。

一つ目は、子供に優しいということだ。私が小さい頃、マンションの敷地内で迷子になった時、一人のお姉さんが一緒に母を探してくれたり、不安がる私を励ましてくれた。日本では、公共の場で赤ちゃんが泣いていると、冷たい目で見られることが多いが、中国ではみんながあやして、その場がとても温かい雰囲気になる。その理由として中国では、赤ちゃんを「宝宝」と呼び、「子は宝」という思想が根づいている。国籍も関係なく、どんな子供もみんな大切に见守っている。

二つ目は、外国人に親切に接してくれることだ。私は中国にいて、日本人だからといって差別されたことは一度もない。むしろ、知っている日本語で話しかけてくれたり、日本料理やアニメなど、日本のことに興味を持ってくれたり、中国人と一緒にいて嫌だと思ったことはなかった。中国には、日本人以外にも外国人がたくさんいるけれど、お互いに仲良く関わっているの、私も話しかけやすかった。政治面では、関係が悪くなっているかもしれないけれど、それを全く感じさせないくらい、実際に街の人はフレンドリーだった。

三つ目は、食文化の奥深さだ。既に日本で普及している小籠包、火鍋、タピオカ以外にも、日本のみんなに紹介したい絶品グルメは山ほどある。修学旅行で行った西安の 麵(ビャンビャン麵)、甘くて冷たいマンゴースイーツ、さっぱりとした食感のきくらげの酢の物など。日本人の口に合う料理が多かった。歴史ある中国各地の様々な料理は、私をとても幸せな気持ちにしてくれた。

このように、中国には良い所がたくさんあり、とても親しみやすい国だ。今までイメージが悪かった人も、良い所に着目してくれたらと思う。

中国に限らず、各国に対する印象は、メディアの影響力がとても強い。しかし、最近では旅行やインターネットを通じて私達個々が抱く各国への理解が深まりつつある。そうした、民間での生きた交流体験を、どんどん発信し広めたいと思う。私は、中国でのよい経験を学校や国際交流の場で、伝えて行きたい。お互いの国のよさを分かち合い、もっと交流が盛んになって、政治面でも民間でも仲が深まってほしい。世界中が偏見なく、互いに尊重し合い、協力し合えるようになることが、私の願いだ。

佳 作

小学生の部 佳作

「ピーちゃんとわたしのおとまり会」

若草小学校 3年 塩沢 恵菜

わたしにはピーちゃんというインド人の友たちがいます。お父さんが仕事で知り合った友だちの子どもで、小学二年生の女の子です。

夏休みにピーちゃんが家にとまることになりました。するとお母さんが「ピーちゃん来るから食べものに気をつけなきゃね。」と言いました。アレルギーかと思ったらちがいました。アレルギーではないけど、お肉やお魚やたまごなど、いのちがあり、生きていたものを食べる事ができません。理由を聞くとピーちゃんが、しんじている神様が生きていたものを食べてはいけないと教えているからでした。たしかにいのちを食べるのはかわいそうだけど、わたしはいのちに感謝をしながら食べるようにしています。でもピーちゃんのように、いのちを食べないことをえらぶのもいいと思いました。牛にゅうや、チーズはだいじょうぶなのかしんぱいだったけどいのちがあったわけではないから食べることができるそうです。

とまりに来たときは、すきなものがいっしょだったからたくさんあそぶことができました。にわにプールを出して水あそびをしたりチーズたっぷりのマルゲリータをいっしょに作って食べながらディズニーのえいがをみたりしました。夜は一番楽しみだった花火もしました。ねる時には和室にふとんをしいて二人だけでねました。ピーちゃんはふとんでねるのは、はじめてだったかもしれません。次に会った時に、聞いてみようと思います。

朝ごはんはいっしょに、ホットサンドを作りました。ピーちゃんはキャベツやピクルス、トマトなどたくさんのやさいを入れました。わたしが入れたのはベーコンとチーズです。二人とも入れた食べものはちがったけど、いっしょにおいしく食べることができました。わたしはやさいがにがてなのでやさいがくさん食べれるピーちゃんがすごいと思いました。食べものには気をつけないといけなかったけど、すきなあそびがいっしょだったからとても楽しかったです。

ピーちゃんのおかげでベジタリアンと言うやさいを中心に食べる人がいることも知りました。こんどはわたしがとまりに行くことになったので、ピーちゃんのお母さんが作るカレーやナンを食べるのだとても楽しみです。

中学生の部 佳作

「貧困について」

北東中学校 1年 長田 七果

私たちは今、新型コロナウイルスの脅威にさらされている。ほんの数ヶ月の間に世界的パンデミックをもたらし、7月の時点で死者はすでに75万人以上。そんな前代未聞の状況によって日本はもちろん、世界中の社会・経済活動に混乱が起き、多くの人々が苦しい生活を送ることになった。そして同時に、この事態は私たちが本当に向き合うべき事実、問題をはっきりと身近にしたように感じられた。

私は以前からニュースなどを通して、自分たちの国と他国の違いについて考えることが多かった。新型コロナウイルスへの対応についても、都市封鎖やITによる行動管理、国民の自主性の重視など、日本と異なる各国の動きを興味深く見ていた。そんな中、国や文化の違いを超え、全世界共通ですぐに取り組まなければならない問題があることを知ったのだ。それは、世界経済の大打撃によって真っ先に悲惨な状況に追い込まれたのが、最も立場の弱い貧困層である、という事実だ。貧困・格差問題はこれまでも世界的課題とされてきたが、新型コロナウイルス感染拡大でさらに深刻化したのである。私は、すべての人々が人間らしく生きるために、そして世界が今の非常事態を乗り越えるために、この問題は必ず解決しなければいけない、と強く感じた。

もともと、世界で貧困に苦しむ人は昨年時点で約13億人といわれていた。特に、アフリカ諸国の貧困率は非常に高く、貧困層の約半分は18歳未満である。さらに、アジアや中南米を含めた世界中で7億人近くが飢餓状態にあり、1分間に17人が餓死しているという。ところが、世界保健機関などがまとめた報告書によると、異常気象や紛争などこれまでの要因に加え、新型コロナウイルスの影響で新たに約1億3千万人が飢餓に陥る可能性があるというのだ。私たちは日常の中でこうした現状を意識しづらいかもしれない。しかし、実は日本でも、2015年時点で7人に1人が貧困とされていて、身近にある話なのである。貧困による衛生事情の悪化は、感染症の蔓延や環境汚染をもたらす。そして、貧困の度合いが極端になるほど教育、労働、健康、生活水準における格差は広がり、社会不安を招く。これは地球全体の問題であり、世界各国が力を合わせて取り組むべき課題なのだ。

実際、世界にはこうした地球規模の課題を改善していくための活動が数多くあり、その中のひとつに「SDGs」がある。「SDGs」とは「持続可能な開発目標」という意味で、貧困や飢餓、働きがいや経済成長、気候変動などの問題に対し、国連サミットで採択された17の目標と、これらを具体的に示した169のターゲットによって構成されている。その第一の目標に掲げられているのが「貧困をなくそう」だ。具体的には、2030年までに極度の貧困をなくす、貧困層の割合を半減させる、適切な社会保障や権利を確保する社会的弱者に配慮した支援を行う、といった内容である。そして、日本でもこれを受け、子ども食堂などの食の支援、貧困層の自立サポート活動、フェアトレードの取り扱いなどに取り組む団体・企業が存在している。しかし、この世界的な課題に対し、私たち個人に何かできることがあるのではないのか。

現実には、日本における取り組みの中にも、子ども食堂や募金活動など私たちの身近に感じられ、協力できるようなものもある。しかし、私自身を含め、そのような活動についてしっかり意識できていなかった人は多いのではないか。その理由は、貧困の現状をしらななかったり、関心がなかったり、自分たちには直接関係のないと思いこんでいるためだと思う。確かにこうした世界的問題に対し、個人ができることには限りがあるが、私たち個人も社会の一員であり、国家の一員であり、世界の一員である。すぐ近くに困っている人がいなくても今、世界のどこかで困っている人がいるという意識をひとりひとりが持つことが、国際協力への流れにつながっていくかもしれない。そのためにも、まずは世界が抱える問題について知り、理解すること。そして小さなことでも何ができることを見つけ、活動を続け、発信していくことが重要だと思う。

今、貧困・格差問題に対して私が思いつく具体的な行動は、残念ながら、学校でも実施されているペットボトルキャップ集めや書き損じはがき集め、募金などしかない。しかし、貧困に苦しむ人を助けたいという気持ちを持ち続け、その現状と解決するための活動があるということをとくさんの人に知ってもらえるよう、自分にできることを探したいと考えている。世界中のすべての人が安全に、安心して暮らせるようになるにはかなりの時間がかかるだろう。それでも、私は自分にできることを継続し、世界に貢献できるよう努力していきたい。

「留学生との交流で思ったこと」

北東中学校 2年 三科 まゆ香

私が前通っていた中学校では、町で行なった留学で来た学生と交流をするという機会がありました。

英語の授業で、自己紹介をし合った時に、発音が良過ぎて、正しい名前を聞き取る事ができませんでした。

私は、少し前まで留学したいと思っていました。私のいとこが、アメリカへ留学しているのですが、送られてきた写真を見て、留学って楽しそうだなと思いました。また、話を聞くと、ホストファミリーの人達はとても優しく、とても楽しいと言っていました。留学へ行く前の話も聞きました。留学へ行きたい人はたくさんいるので、留学へ行くための審査があったそうです。英語はもちろん、テストのようなものを五教科やって、その上位の人が留学できるようになっていました。英語を話すというテストが一番緊張したと言っていました。審査員がいる中で色々な審査を受けて、そして、留学へ行けてすごいな、いいなと思いました。

今の私では、留学に行ける程成績が良くないので、全体の成績とテストの点数を上げられるように、勉強をがんばりたいと思います。特に、英語は勉強して、現地で生活している人々の会話なども理解できるようにしておきたいなと思っています。

本当なら今年の夏休み中にお父さんの友達の家に遊びに行く予定でした。その方は、えみちゃんと言って、アメリカ人の旦那がいます。アメリカに住んでいるので、その家へ行く予定でした。コロナで行けなくなってしまいましたが、とても楽しみでした。私は、アメリカへ行ったら、やりたい事がたくさんあります。例えば、プールへ行ったり、アメリカにしかないスイーツを食べたり、普通に散歩をしたいです。また、えみちゃんが住んでいる家はとても広く、すごかったです。

私は、国同士の関係や今の関係になった理由などに興味があります。第二次世界大戦についても色々な見方があって、おもしろいなと思ったのがきっかけです。

また、貧困者が多い国について調べる事があります。日本ではあたりまえの事がとても恵まれている事だと、知ることができました。例えば、きれいな水をたくさん飲めること、お腹いっぱいご飯が食べられること、トイレがあることなどです。私は、特にご飯を食べられることが幸せだなと思います。貧困者が多い国について調べることもある。と書きましたが、餓死してしまう人が多いというのが気になるので、このような国を課題などで調べる人が多いです。恵まれている事の例で書いた事は、健康に長生きしていくために必要だと思います。だから、今自分があたり前だと思っている事に感謝の気持ちを持って生活していきたいなと思います。

道徳の授業で知った、VNHCR という国際連合の難民支援機関という「難民」の保護・救済を行う仕事はかっこいいなと思いました。世の中には、究極の選択というのがあるけど、人の命と自分にとって必要な物のどちらかを選択しなければならないという事がおきやすい仕事なのではないかなと私は思います。

国際交流・国際理解などについて、私が知らない事はたくさんあります。でも、国が違うという事は、考え方も価値感も違うという事になります。私は、色々な考え方、見方ができるようになるために、一つ一つの物事を色々な視点から見るようにしていきたいです。また、色々な地域の文化についても学んでいこうと思っています。

今の私には、できない事がたくさんあります。でも、今できない事ができない事のままにならないように、学校の勉強やその他に自分が興味を持った事を勉強して、この世界に住む人達の命を守れるような人になりたいなと思っています。

「平和な世界にするために」

山梨英和中学校 1年 関 満理子

私は、これまで何人もの海外の方たちと交流したことがあります。

二年前には「東南アジア青年の船」に乗船された、ブルネイのシティさん、マレーシアのディディさんと友達になりました。彼女たちはとてもフレンドリーで私にたくさん話しかけてくれました。私はブルネイという国を詳しく知らなかったので調べてみました。ブルネイはボルネオ島にある小さな国で、イスラム文化を基盤とした王政の国です。日本は最大の貿易相手国だそうです。イスラム教の国で、食べ物や習慣が違っていると聞いていたので、仲良くできるかな、と不安に思っていたのですが、笑顔で親しみやすく接してくれてうれしかったです。そして一緒に写真を撮った時も陽気で、写真にメッセージまで書いてくれました。本当にいい方たちで、楽しい時間を過ごすことができました。

また、アメリカの方を迎えたこともあります。その方はキャシーさんとケイリーさんという方で、二人はおばあさんと孫の関係でした。私たちは山梨ならではのワイナリーを案内することにしました。ワイナリーではブドウ畑の様子を見たり、ワインの貯蔵庫を見たりしました。初めて見る景色や製造工程にとっても興味深く見入っていました。最後にはワインを飲むことができ、キャシーはワインが好きなので、とてもおいしいと言っていました。そして私の家に来て、習字を書いてあげたり、実際に体験してもらったりしました。キャシーとケイリーは、習字はすごく難しいけれど日本の文化はすばらしい、と言っていました。

去年の夏には、私の家に韓国から高校生の女の子が来てホームステイをしました。彼女の名前はウォンソンさんです。彼女が来た時は、日韓関係が悪化していたところでした。私は彼女が日本のことをどう思うか気になっていました。しかし彼女は全く日本のことを悪いように思っていないで、彼女に何が好きなのか聞いてみると、日本の音楽やアニメが好きだと言っていました。私は K-POP の女性グループが大好きなので、音楽の話も盛り上がりました。現在、政治の場面では日韓関係があまりよくないかもしれませんが、日本の文化が好きな韓国人も、日本では私のような韓国の文化や K-POP が大好きな人も大勢います。だからこのような外国の方と交流できる機会はお互いの考えや意見がわかってとても貴重な時間だと思います。

私はこれまでの経験を通して、様々な国の人たちと交流することは、相手の国の文化や考えを知ることにつながり、相手の国を身近に感じることを実感しました。国と国との間ではいろいろな問題がありますが、その問題を解決するには世界の一人ひとりが他の国や文化に理解を深めることが大切だと感じます。私はこれから平和な世界に近づけるように、今度は私が実際に海外に行って現地の様子を見たり、文化を体験したりして、相手の国を理解できるようにしていきたいです。

第 33 回（令和 2 年度）
「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」
優 秀 作 品 集

令和 3 年 1 月 発行

発行者：公益財団法人小佐野記念財団
山梨県甲府市丸の内一丁目 6 - 1
（山梨県知事政策局国際戦略グループ内）
TEL055(223)1435